

昨日まで、鹿児島でした。松本俊彦さん・斎藤環さんという二人の精神科医のお話は、きわめて、刺激的で、意味あるものでした。一点、残念な間違いも、あったように思いつつ。忘備録として、メモをここに残します。

アディクションは、セルフコントロールに執着すると、陥るものである。

対話は、ヒエラルキーの否定。

対話は「反PDCA」である。つまり、計画的には進めない・進まない。どんどん発展するのが「対話」である。「対話」がうまくいくためには「運」が大事。

「対話」で精神の統合を失調した方に向き合うコツは

- ・原因探しはしない。
- ・未来を見る。
- ・どんなストーリーを共同で作れたか　　を、考えるところにある。

一対一の権力関係が密室に収まると、必ず、ハラスメントあるいは「転移」の温床になってしまう。だから、チームで対応しなければならない。できないときは、対応しない方がよい。.

「診療所」や「教会」など、＜場所＞が、目的を担保する。だから、その中では目的を措いて実践できる。つまり、「今は、治る事・救われることは、考えないで、お話をしましょう」と言えるためには、＜場所＞が、決定的に大事。

.
Respectful curiosity＝「敬意を伴う好奇心」を、いつも、いただいていること。
そうすれば、対話はうまくいく。

.
対話は結論が出ない。　　対話は時間厳守で。

.対話はポリフォニー。　　モノフォニーではない。

ハーモニーでもシンフォニーでもない。（これは、実際のポリフォニーをご存じない結果のご意見でした。残念。ポリフォニーは、シンフォニーにならずにハーモニーを産み出します。それは、　倍音という「別の音＝天使の声」を呼び出す。ポリフォニーは、超越を呼び出すハーモニーなのです。）

.もし、統合を失調している方と対話するなら、

- ・まず、チームを組んで対面した上で、
- ・クライアントの主観世界を掘り下げる。
- ・その中で、支離滅裂な話者の、その全体の
文脈を変えるように、チームで働きかける。

そうすると、統合や主体性や論理が回復することが、実に多く、ある。

妄想は、否定されると強化される。きちんと興味関心敬意を示すのがコツ。

ラットの実験によると、薬物で、脳はやられない。

ただ、欲望や意志が薬物を引き込むと、脳も、やっぱり、壊れてゆく。

(これは、すごい実験結果でした)

さあ、私が今あなたにしてほしいことを記そう。礼拝に集まった時には、各々、全ての
人にとって役立つものを準備しなさい。つまり、詩編を歌うこと、教えを説くこと、物語
を宣べ伝えること、祈りを導くこと、洞察力を養うことを、それぞれ備えて集まることに
しなさい。

——コリントの信徒への手紙（一） 14章26節

マルコが伝えた「良い知らせ」

——マルコ伝福音書 訳述——

川上直哉

神様の わが子と慈しみなさる 尊き方、

私たちを助ける人 イエスと呼ばれたキリストの、

その「良い知らせ」の そのものの物語。

こんなことを言ってから、イエス様は、また群集を呼び寄せて、こう言いました。「よく私の話を聞いて、理解して下さい。いいですか、人間の外から人間の中へ入って、人間を穢れたものにする、そんなものは、存在しないのです。人間の中から出てくるものが、人間を穢してしまうのです。さあ、聞く耳のある人よ、聞きなさい！」

(中略)

* * *

そんなことがありましたから、「わからずや」がうようよしているユダヤ国のガリラヤから立ち去って、イエス様はローマ帝国シリア属州フェニキアという国の港町テュロスに逃げて行きました。この町はものすごく古い歴史ある町で、しかも、今でも大いに賑わっていました。たくさんの人が行き交う国際交流都市として、ギリシア語を話す人が多くいました。そこだったら、誰にも見つからない。イエス様はそう思って、故郷を離れ、この大都市に隠れるようにしてやってきたのです。ある家にいて、じっとしていました。するとやっぱり、一人の女の人がイエス様の所にやってきました。何しろ、イエス様です。隠れても、見つかってしまうものです。やってきたのは、フェニキア人で、ギリシア語を話す人でした。この女性には、娘がいました。その娘さんは、かわいそうに、悪い霊に憑りつかれてしまっていました。お母さんである彼女はイエス様の所に来て、がばっと土下座をします。そして「娘を助けてください！」と言いました。でも、イエス様は、いつもと少し違います。疲れていたのでしょうか。それよりむしろ、もう嫌になっていたのでしょうか。そして加えてきくと、ギリシア語で急にまくしたてられたからでしょう。イエス様はこう、彼女がわかる言葉（つまりギリシア語）で、だいたいこんなことを言いました。

「まず、子どもがお腹いっぱいになるべきなのだ。子どものパンを取り上げて、犬っころなんかにあげるものではないのだ。」つまり、「私は自分の仲間・ユダヤの同胞を助けようと、病気を治し、給食までして、頑張った。でも、理解してもらえず、嫌われ、疲れて今ここで休んでいる。神様は、私をガリラヤに遣わして、神様の子どもたちのために良いことをした。でも、私は疲れた。もう勘弁してくれ。ガリラヤの外まで来て、これ以上、くたびれさせないでくれ。」と、そんな思いがいつべんに口から出てきたのです——しかも、外国語のギリシア語で。それにしても「犬っころ」とは、ずいぶん言い方です。土下座しているこのお母さんは、ぐっとなってから、でも、顔を上げてイエス様を見据

えて、そしてこう言い返しました。「りっぱな、りっぱな、大先生。はい。おっしゃる通りです。でも、ですね。食卓の下にじっと待っている憐れな犬たちは、子どもたちがこぼして落とすパンくずを見逃さないのです。必ず、主人に叱られてでも、それを食べるものです。」じっと見つめるその顔いっぱい、娘を思う思いが溢れています。そんな母親の勢いに押され、一気に語られた流ちょうなギリシア語を飲みこんで、イエス様は“はっ”として、そして（やっぱりギリシア語で）言いました。「その言葉の通りだ。さあ、行くのだ。悪い霊は、もう、吹き飛ばされて出ていったのだ！」そう言われて、喜んで家に帰ったこの女性は、驚きました。床の上に、まるで投げ出されたかのようにして、娘が倒れて寝ていたのです。悪い霊がものすごい勢いで吹き飛ばされた、その時の勢いに、この子はくたびれ果てたんだ。そう思って、彼女は娘を介抱したのでした。

そしてイエス様は、また出発しました。今度は、逃げるのではありません。逆です。今度は、ガリラヤに戻って行きました。その時、南のガリラヤへ直接は行かず、テュロスの町と並び称される北方の大都市・シドンに向かい、それから、ガリラヤの真ん中にある湖を目指しました。そして湖の向こう側、デカポリスの町がある場所へと進んだのでした。すると耳が不自由で、言葉にも不自由している人が連れてこられます。人々は「この人の手当てをしてあげてください」と頼むのです。すでに大勢の人が集まってきていました。イエス様は、この障がいと一緒に生きている人と二人きりになる場所へ行きました。それからこの人の両方の耳の穴に指を入れてから、唾を手につけて、その手でこの人の舌を触り、そして言いました。「エッフアタ！」——これはイエス様の国の言葉（アラム語）で「開け！」という意味です——すると、耳は開き、舌のもつれも解けてしまいました。

イエス様はそこにいた人々に「このことは誰にも言わないように」とくぎを刺しました。でも、くぎを刺せば刺すほど、人々は言いたくなるものです。それは、イエス様の最初の活動の時と、まったく同じです。やっぱり同じく、みんなものすごく驚き喜んで、「あの先生は、見事に病気を治すぞ。耳が聞こえなければ聞こえるようにするし、口が利けなければ利けるようにするぞ！」と言いふらしてしまいました。

そうしてまた、結局ものすごい数の人が集まってしまいました。その人たちは無料で治してくれるイエス様を頼ってくる病人や障がい者です。ですから、食べるものも十分に持ってきていませんでした。イエス様はお弟子さんたちを呼んで、言いました。「なんとかわいそうなことだろう。気の毒でならない。三日もここにこの人たちは、もう食べ物もないようだ。ずいぶん遠くから来ている人もいる。このまま家に帰らせたなら、途中で弱ってしまうだろう。せっかく病気が治っても、それじゃあ意味がない。」すると、お弟子さんが答えました。「こんな辺鄙なところですよ。どこで買えば、この人たちの食事を用意できるでしょうか。『荒れ野でパンを用意する』ことなんか、どうやって、できるでしょう。」

イエス様は「パンはいくつある？」と聞きますと「七つです」と答えが返ってきます。するとイエス様は人々を地面に座らせて、その七つのパンを取り感謝してこれを割き、そしてお弟子さんたちに渡して配らせました。お弟子さんたちはこれを配りました。いくつかの小魚も持ってこられましたから、イエス様はユダヤ地方の習慣通りの祝福をして、お弟子さんたちにこれを配らせたのでした。みんな、食べて満足しますと、パンくずが残りしました。集めてみると、それは七籠もあったのでした。男だけでも、だいたい4千人もいたのです。そうしてイエスさまは、みんなを解散させたのでした。

そしてすぐ、イエス様はお弟子さんたちと一緒に舟に乗り、ダルマヌタ地方へと入っていきました。そこでも「ファリサイ（分離）派」の人々が出てきて、イエス様にあれこれと実にうるさいことを言い始めます。「天からの徴（しるし）」はどこにあるのかと、イエス様に挑戦したのでした。イエス様は魂の深いところから吐き出すような深いため息をついて、こう言いました。「この人たちは、どうして『徴』ばかり欲しがるとだろう。アメン！あなた方に言っておきます。こんな連中に『徴』が与えられることがあるだろうか、いや、ない！」そして、その連中をほっておいて、イエス様はそこを離れて対岸へ向かったのでした。

そんなことがあったので、お弟子さんたちはダルマヌタ地方で食料を調達し忘れてしまいました。舟の中には一つのパンしかありません。イエス様はそれを見て、お弟子さんたちにわかるようにと、はっきりこう言いました。「『パリサイ派のパン種』と『ヘロデのパン種』には、気をつけなくちゃいけないな。」お弟子さんたちは「ん？」と思いながら、ともかく、パンが無いのは誰のせいなのか、パンが無いのをどうしたらよいのか、そもそも腹が減った、などとば

かり話しを続けています。それを見ていたイエス様は、少し怒って言いました。「パンを持っていないことが、何だというのですか。なぜ、まだ、何もわからないままなのですか。何ともはや、心が硬くなっていること！」さらに続けて「以前、あなたたちに私は、『あの群衆については、旧約聖書に

眺めているが
見えていない。
聞いてはいるが、
理解しない。

と書いてある通りのことが起きている』と言いましたね。でも、どうでしょう。それは結局、あなたたちも同じなのですか。さあ、思い出してごらん下さい。五つのパンを割いて五千人で分けあった時、残ったパンくずで、いったい、いくつの籠がいっぱいになったのですでしたか。」お弟子さんたちは答えて「十二の籠がいっぱいになりました」と言うと、イエス様は重ねてお訊ねになりました。「そうでしょう。そのあとで同じように、七つのパンを割いて四千人と分かち合いましたね。その時はどうでしたでしょうか。」お弟子さんたちは答えて「七つの籠がいっぱいになりました」と言いました。イエス様はお弟子さんたちにこう言います。「まだ、分からないのですか。」

イエス様とお弟子さんたちは、ベツサイダの村に到着しました。人々が、目の見えない人を連れてきます。「手当てをしてあげてください」と、お願いするのです。それでイエス様は、その人の手をとって村の外へと一緒に出て行きました。それから、その人の目に唾をつけ、手を置いてから言いました。「何か見えますか？」するとその人は上の方を見上げて「人が、何人か、います・・・それとも、木々でしょうか・・・でも歩いているようにも見えます。」イエス様はもう一度、その人の目に手を置かれました。すると、その人ははっきりと目を開き、回復したのでした。実に、その人は全てははっきりと見えるようになったのです。イエス様はこの人を家に帰させます。その時、こう言いました。「この村には入らないように。この村の誰にも、このことは知らせないように。」

こうしてイエス様は、「フェニキアのお母さん」との出会いを挟んで、同じことをなさいました。でも、それは、その出会いによって、はっきりと違ってきたのです。病人を癒し、食事を与え、「わからずや」と論争し、語っても人に理解されず、弟子を教えても弟子への期待は裏切られる。そこまでは、同じ

です。でも、「フェニキアのお母さん」との出会いの後、イエス様は、人の見ていないところで静かに、少しずつ、一人ずつ、目を開いて行かれる。その中で、痛みを引受けながら。それで、イエス様はお弟子さんたちとこんな話をされたのでした。

それはカイサレイアと呼ばれる村々へ向かった時のことでした。このころ、「カイサレイア」と言えば、ヘロデ大王が作った地中海の港湾都市・カイサレイアが有名でしたが、もうひとつ、ヘロデ大王の息子・フィリッポスが自分に分け与えられた領土の首都として造った都市も「カイサレイア」と呼んでいました。その辺りは、「フェニキアのお母さん」との出会いの前に、「五つのパンを割いて五千人で分けあった」最初の給食の後、イエス様が行かれたところです。今回、「七つのパンを割いて四千人と分かち合った」給食の後にも、同じところに行って、でも今回、イエス様とお弟子さんたちは、道すがら、こんな話をされたのです。

「世間の人々は、私のことを、いったい何だと言っているのでしょうか。」とイエス様はお弟子さんたちに尋ねました。お弟子さんたちはイエス様に答えてこう言いました。「水にしずめる儀式のヨハネだ、と言う人もいます」「そうではない、旧約聖書の英雄である預言者エリヤだ、と言う人もいます」「また別の人は、伝説において語られた、あの終末の預言者だ、と言っています」。するとイエス様は「では、あなたたちは、私を何だと言っているのですか」と聞きますと、ペテロが（少し得意そうになって）こう言いました。「私たちは、『この先生こそ、私たちを助けてくれる人・みんなが待ち望んでいたメシア・キリストだ！』と言って回っています。」それでイエス様は怒って「そんなことは、誰にも言うな！」ときつくお叱りになりました。その言い方は、けがれた霊を吹き飛ばす時の、あの時の言い方そのものでした。それからイエス様は、次の大切なことを教えました。つまり、「人の子」は多くの苦しみに^あ遭うこと。「長老・祭司長・学者」と呼ばれた人々（つまり、イエス様の時代のイエス様の国で権力を分け合っていた人々のすべて）から、打ち捨てられること。殺されること。そして、三日の後によみがえるはずであること——このことを、イエス様は、誰にでも、はっきりよくわかるように、語ったのでした。

「イエスこそ、病気を治してくれる人だ、神様の聖者だ、救い主だ、キリストだ」ということを、決して誰にも言わないように、と厳しく戒めたイエス様です。では、「イエス様」とは、いったい何であると、私たちは言うべきなのか。イエス様の答えは、はっきりしていたのです。人間というものは、たくさん苦勞し、権力者に見捨てられ、いのちまで奪われる、それでも、必ずよみがえる——それがつまり「イエス様」が体現しておられる事なのだ。そのことは、いつもはっきりと、すべての人に示さなければならないのだ。そんなことを、イエス様はお話になったのでした。

するとペテロがイエス様を脇の方へ連れ出して、静かに強く叱りつけます。そのときイエス様は振りかえり、お弟子さんたちに向かって、つまり、ペテロを背にしたまま、ペテロのことを叱りつけて、こう言うのです。「後ろに下がっている！ 告発者・サタンめ！ 神のことを考えず、人のことを考える者よ！」そしてイエス様は有象無象の人々をお弟子さんたちの所へ呼び集め、そしてこう言いました。「誰であっても、もし私についてきたいと思うなら、自分自身を否定して、自分自身の十字架を背負って、そうして私についてきなさい。

『自分らしくいよう』と願う人は、みんな、自分らしさを失うことになるのです。今、私と私の良い知らせのために自分らしさを失おうとしている人は、その人らしく生きて行くことができます。いいですか、全世界を儲けたとしても、自分らしくなくなってしまうたら、それは一体、誰の得になるのでしょうか？ 実際、全世界を手に入れた人は、罰金を取られるようにして、自分らしさを失っているではありませんか。もしそうなったとしたら、自分らしさを取り戻すために、いったい、こんどは何を支払えばいいのでしょうか。こうしたことを語る私のことを、そして私のこの言葉を、恥ずかしく思っている人は、いったい誰でしょうか。頓珍漢な人ばかりが幅を利かせている、こんな^{たいはい}顔廢した世の中で、そんなことをする人は、誰であっても、聖なる天使と共に天の御父上様（神様）の輝きがこの世界に満ちる時、人の子（イエス）によって恥を見ることになります。」そう言ってから、イエス様はこうおっしゃるのです。「アメン！ あなた方に言っておきます。実際、あなたたちの中に、神様の力がはっきりと現れるその時まで、死の味わいを知らないままに過ごす人もいますね。」——実際、たくさんの人がひどく苦勞し、権力者に見捨てられ、いのちまで奪われる、そんな中で、このお話を私はまとめています。それでも、そうしたことを他人事のように思っている人もいます。そうした人々のことを思って悩んでしまう私たちに、イエス様は、こうしてはっきり、本当のことを教えて下さっているのです。